

令和 4 年 6 月 17 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00306

研究課題名(和文) 今川了俊著『難太平記』を中心とした南北朝・室町時代初期における武家文化の研究

研究課題名(英文) A Study of Samurai Culture in the Nanbokuchō and Early Muromachi Periods,
Focusing on Ryōsyū Imagawa's "Nan Taiheiki"

研究代表者

和田 琢磨 (WADA, Takuma)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：40366993

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：『太平記』の生成を伝える基本資料で、14世紀末～15世紀初期(南北朝時代後半から室町時代初期)にかけての歴史や武士の思想、文化を伝える今川了俊著『難太平記』の基礎研究を行った。具体的には、現存する『難太平記』の諸本を比較検討し、校本を作成した上で、注釈を付した。また、『難太平記』が成立した時期と同じ頃に祖本が書写されたと考えられている『太平記』の重要伝本西源院本の問題点を明らかにし、それを解決するためには同系統の織田本を底本とした校訂本文を作成する必要があることを主張した。この他にも『鎌倉大草紙』など『難太平記』と関連する内容を有する室町時代の作品の検討を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今川了俊は南北朝時代から室町時代にかけて活躍した、文武に秀でた武士である。その了俊が著した『難太平記』には当時の武士の肉声が伝えられているだけでなく、南北朝時代を考える際に無視することの出来ない『太平記』の生成についての言及がある。よって本研究では、南北朝・室町時代の武士の思想や文化研究、あるいは『太平記』研究の基盤を固めるべく、『難太平記』の本文の整備と注釈を付け、研究の基礎を固めた。

研究成果の概要(英文)： We conducted basic research on "Nantaiheiki" written by Ryōsyū Imagawa, which is a basic source for the generation of "Taiheiki" and conveys history, samurai thought, and culture from the end of the 14th century to the early 15th century (late Nanbokuchō period to early Muromachi period). Specifically, we compared and contrasted various extant editions of "Nantaiheiki," prepared a proof, and added annotations.

He also clarified the problems with the Saigeninbon, an important manuscript of "Taiheiki," which is thought to have been copied at the same time as "Nantaiheiki" was established, and argued that it is necessary to create a revised text based on the Oda-bon of the same lineage in order to solve these problems. In addition, he examined other Muromachi period works such as "Kamakura oozoshishi" that have contents related to "Nani Taiheiki."

研究分野：日本中世文学

キーワード：難太平記 今川了俊 太平記 西源院本『太平記』 織田本『太平記』 『鎌倉大草紙』 南北朝時代 室町時代

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は『太平記』研究を専門とし、室町軍記『明德記』『応永記』の研究業績も有する。これらは、南北朝時代から室町時代初期にかけての戦乱を描いた軍記物語であるために、同時代の文学作品や歴史資料を取り扱うことも多い。特に『太平記』の作者や生成の問題に言及し、同時代人の『太平記』享受資料としても注目される『難太平記』に触れる機会は非常に多い。それは、『太平記』の作者・生成・諸本の研究は『難太平記』の情報なくしては成立しないことによる必然である。だが、このように重要な作品であり『難太平記』に言及した論文も相当数あるにもかかわらず、研究の基礎となる校訂本文や注釈がなかった。

2. 研究の目的

『難太平記』は、南北朝時代から室町時代初期に活躍した足利一門の武将、今川了俊が応永9年(1402)に著した書である。この書は40丁(頁)程度の小品ながらも古くから注目されてきた作品である。その理由は大きく以下2点に整理できると考える。

14世紀の社会・文化状況を伝える歴史資料が少ないため、歴史資料として貴重である。実際に『太平記』に登場する足利一門に連なる人物によって書かれた、具体的に『太平記』の生成状況について記された唯一無二の資料である。

特に重要である。『太平記』は14世紀の約40年間の状況を活写した南北朝時代を代表する軍記物語であるために、文学のみならず、歴史学・文化史学・思想史学等の研究に不可欠な作品と位置付けられている。その『太平記』の作者・生成についての具体的様相を伝えているため、『難太平記』の研究史は『太平記』の作者・成立のそれにほぼ完全に置き換えられる。また、『難太平記』の記事に基づいて、『太平記』の書き継ぎ(段階的成立)説や諸本の派生の問題の研究も展開されてきた。つまり、『難太平記』は『太平記』の研究には必要不可欠な書として位置づけられてきたのである。それに加え、近年は足利義満の執政に対する「政道批判の書」(桜井英治氏『室町人の精神』、講談社、2001年)という新たな視点も指摘され、『難太平記』は足利将軍家を頂点とした、南北朝から室町時代初期にかけての武将の思想状況を知る上でも重要な書でもあることが共通認識となってきた。

このように、『難太平記』は文学・歴史・思想等の各方面から注目されてきた重要なテキストであるわけだが、諸本の整理や校本の作成といった基礎的な整備が十分になされているとはいえない。そこで、本研究では、現存する『難太平記』の写本すべてを調査し校本を作成した上で注釈を付すことを目指した。

3. 研究の方法

伝本に1つずつ当たった研究は未だなされていないため、『難太平記』諸本の書誌調査から始める。その上で、諸本の紙焼き写真を基に本文の校合と校本の作成を行った。関東・北陸・京都の伝本調査は研究代表者と研究協力者が、その他の伝本調査は研究分担者が中心となって行った。なお、『太平記』本文は西源院本と神宮徴古館本を中心に利用することを予定しているが、公刊されている本では書き入れ等が見えない部分もあるために西源院本は原本を実見の上でカラーの紙焼き写真を取った。注釈は、前半部は研究代表者が、後半部は研究協力者が行い、相互

に批判検討し合った。

4. 研究成果

コロナ禍の影響ですべての伝本を調査することは叶わなかったが、主要伝本の調査及び紙焼き写真による本文校合は大凡完成させられた。また、注釈も、最終的な確認をするまでには至っていないものの、全体にわたり付すことができた。加えて、西源院本『太平記』の原本調査から、東京大学史料編纂所所蔵の影写本が原本を忠実に写したものであるという従来の説が誤っていたことを明らかにすることができ、西源院本『太平記』の本文整備の重要性を説くことができその他にも室町時代の武家文化を考える上で有益と判ぜられる作品についての研究も行えた。具体的に、各年の活動を示すと次の通りとなる。

1年目は、『難太平記』および周辺資料の伝本調査を行い、校本を作成する準備を進めたほか、11月に研究会を開き、調査の進展の確認、問題点の検討と共有、今後の研究の進め方の確認を行った。具体的には、『難太平記』の現存諸本すべてを比較検討し注釈を付けるための基礎を固めることを研究活動の中心に据えた。このほかにも、『太平記』などの注釈を付けるために必要な文献の調査・研究、『難太平記』の特徴を類推させる作品の研究を行った。また、その成果として、有力守護大名佐々木京極家が作成に関与したと言われてきた天正本太平記の再検討、『難太平記』と同時代に成立したと考えられ南北朝・室町時代の太平記の要本とされている西源院本本文の問題の指摘、『難太平記』と同じく『太平記』の成立伝承を乗せる『鎌倉大草紙』の検討、熊野の水軍（海賊）を扱う『安宅一乱記』の検討、を行い、それぞれ論文として発表した。

2年目は、『難太平記』本文に基本的な語釈を付け、全体像を把握する作業をほぼ終わらせた。本来であれば、閲覧可能な伝本をすべて確認し、本文異同を明らかにしてから行う予定であったが、前年度後半以来続く新型コロナウイルスの影響で、この作業を終えられなかった。したがって、伝本を確認できるようになった後に補訂する方法に切り替えた。また、本来であれば直接集まって研究会を行う予定であったが、それも難しい状況であったので、メールとZOOM会議で研究活動を進めた。メールでは、各自が行った研究資料を送りあい、資料と情報の共有を図った。その上で、ZOOMで互いの資料の説明と意見交換を行い、現時点での問題点と今後も続くと考えられるコロナ禍における研究の進め方を話し合った。メールのやりとりは複数回行い、ZOOMでのオンライン研究会議は、11月・1月・3月におこなった。注釈の範囲は、校正本（版本）の上巻該当部分と追加部分を研究代表者が、下巻相当部分を研究分担者が中心になって進め、次年度に双方の成果を検証し合い総合的な注釈の原稿案を完成させることを目指すこととなった。

3年目は、『難太平記』全体の注釈付けの完成を目指して活動した。コロナの影響で原本が確認できないなど、一部活動出来ないところもあったが、研究史の整理と語釈等は概ね出来たと考えている。その他に、室町時代初期には原本が存在していたと考えられている西源院本系『太平記』の本文研究も行った。すなわち、織田本と西源院本の本文の比較検討を行い、織田本を底本とした西源院本系の校訂本文を作成して、『難太平記』の注釈に利用できる本文を作ることを目指したのである。この作業は、今後も継続する予定である。また、興正派本山興正寺が所蔵する未翻刻資料、お伽草子『もちうち』について、これまでの調査研究における蓄積も活用しながら、その内容を考察した。本資料は、室町時代の戦乱である永享の乱・結城合戦に取材する

作品であるため、現在の研究においては異なる分類のものとして扱われるが同じ素材を持つ軍記との関係を対照確認し、最も近似するものを指摘するなどした。本研究において対象とした『もちうち』を含め、この研究期間で考究した作品・資料は、いずれも室町時代（広義）の武家の動向や文化に関わっており、本科研費研究課題と地続きのものといえる。例えば、『安宅一乱記』については、室町時代の水軍（海賊）の研究という点でも関わっており、『鎌倉大草紙』については、叙述の対象が『難太平記』と重なる部分のあることは先行研究に指摘されたとおりである。また、『鎌倉大草紙』の伝本研究の進捗は、『難太平記』の伝本研究に立脚する本科研費研究課題における注釈作成活動にも寄与するものである。

今後は、これらの成果をさらに発展させながら、研究期間中に閲覧できなかった『難太平記』の原本調査も完成させた上で、『難太平記』の注釈の出版を目指していきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 田口寛	4. 巻 55・56
2. 論文標題 『鎌倉大草紙』二巻本系統 / 彰考館本系統の小群	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本文学研究	6. 最初と最後の頁 29-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 和田琢磨	4. 巻 3
2. 論文標題 『太平記』と武家--天正本と佐々木京極氏の関係を中心に--	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 松尾韋江編『軍記物語講座3 平和の世は来るか 太平記』	6. 最初と最後の頁 34-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 和田琢磨	4. 巻 190
2. 論文標題 西源院本『太平記』の基礎的研究--巻一・巻二十一の書き入れを中心に--	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国文学研究	6. 最初と最後の頁 55-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田口寛	4. 巻 56
2. 論文標題 『安宅一乱記』について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 軍記と語り物	6. 最初と最後の頁 42-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 和田琢磨	4. 巻 1
2. 論文標題 点描 西源院本『太平記』の歴史—古写本から文庫本まで	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 荒木浩編『古典の未来学』	6. 最初と最後の頁 671-688
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田口寛	4. 巻 4
2. 論文標題 『鎌倉大草紙』とその周辺—「作品」として考えるために—	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 松尾葦江編『軍記物語講座4 乱世を語りつく』	6. 最初と最後の頁 165-182
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田口 寛 (TAGUCHI Hiroshi) (50625853)	梅光学院大学・文学部・准教授 (35501)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	田中 奈保 (TANAKA Nao)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------